

私のモチーフ

ふたつの異なるテーマと私

会員 内木 健二

現代はITがまるで本物まがいのアートをつくってしまいう時代になりました。

それは美術を愛する人間にとって創造性の根底を考え直させられることにつながっています。

もともとアートは人間の心の創造表現の世界。ITが出現する前から現代アートはその存在意義を問われ新たな地平を目指すことが求められてきましたが、いまだ答えは出ていません。

人々の目も肥えて来て絵画展も「コンセプト」をしつかりと前面に出したり、「こと」化、「できごと」化しないかわざわざお金を使って見学に来てくれる人はいません。

これから現代アートがどこへ向かっていくのか、大変難しい課題ですがそのゴールがITCの対極にあることは確かです。

テーマ:

地歌舞伎の役者たち

私の示現会展の作品画題は現在、地歌舞伎の役者が主題です。

私の地元ではよく知られている地歌舞伎ですが全国的にはあまりポピュラーな画題ではありません。

地元の岐阜県中津川市加子母(かしも)の芝居小屋、「明治座」(名誉館長は大歌舞伎の中村七之介さん)は地元民が農閑期の娯楽として歌舞伎を楽しむために明治27年に住民の出資と奉仕によって建てられた木造建築で文化財。NHKの高橋英樹さんの日本の芸能で放映されたり、故坂本龍一さんに明治座が愛されたり、日本画家の岡村桂三郎多摩美大教授の展覧会も行われました。

また、故田中千香士東京芸大教授がこの古い木造の芝居小屋

でオーケストラを演奏すればさぞ素晴らしい響きになるだろうと開始された明治座クラシックコンサートは毎年東京芸大OBと世界的な演奏家達によって30年近くにわたって開催されています。

私もそれに倣って昨年5月、「芝居小屋に100号の地歌舞伎役者の油彩画を立てて展示したらどうなるだろう？」と3年がかりで描いた100号の油彩画を36点展示してみました。少しほの暗い会場ですが意外に良い雰囲気になりました。「芝居小屋で展示」というコンセプトを広く発信したのがよか



明治座の舞台上の展示 (昨年5月)

ったのか、明治座という知名度もあってか、観光バスで隣町の下呂温泉や市内の馬籠宿へ来る旅行者も含めて地元民など1000名近くが鑑賞してくれました。



客席と花道の展示の一部



楽屋内の展示の一部

テーマ②:
古事記と神産み、
国産み、ドラマの世界

現在、進めているもうひとつの絵画展のコンセプトは「古事記と人の摩訶不思議な世界」です。

わかったようでわからないことばかりの絵画展なので『この絵画展の意図するところはいつたい何か?』と問われても『自分が知りたい謎を追求していったらこうなった。』としか言いようがありません。天地開闢(あめつちかいびやく)時の神話と人の壮

大で世界摩訶不思議な世界を具象と半抽象でベニヤ板30数枚に描いています。

古事記の記述では、天地開闢の時、別宇宙(ことあまつこ)に独り神(一元性のことか?)の造化三神(ぞうかさんしん)(天御中主あめのみなかぬし)神、高見産霊(たかみむすび)神、神産霊(かみむすび)神)が自然発生的に生まれ、すぐに姿を隠して見えなくなります。続く神世七代(かみよななよ)でいざなぎといざなみの夫婦神(めおとかみ)が宇宙に現れる頃から世界は陰陽二つのエネルギーによる神産み、国産みに移っていきます。

そんな考えを巡らせている内に、古事記の物語は「宇宙と地球と人間の壮大な創造と再生」のドラマになっている事に気がつきました。

私は具象を追求する示現会の会員ですので基本的に具象画でこの主題を表現しています。

しかし神話や人の心の世界は見た事がないので半抽象で表現するほかありませんでした。

絵が完成して展示会を開催するのは一年位先のことになります。



風のメッセンジャー



おおわたつみ
大綿津見(古事記より)



おおやまつみ
大山津見(古事記より)